

令和6年「新之助」栽培暦(エコ・5-5 栽培用)[ながおか地区版]

JA えちご中越ながおか新之助研究会(令和6年作成)

【新之助 食味・品質基準】

- 整粒歩合 70%以上(農産物検査等級 1 等相当)
- 水分含有率 14.0%以上、15.0%以下
- 玄米タンパク質含有率 6.3%以下(水分 15%換算)

【品種の特徴】

- 出穂期及び成熟期は「コシヒカリ」に比べ 6 日および 7 日程度遅い晩生種
- 極良食味で高温耐性が強い
- 草型は偏穂数型、耐倒伏性はやや強、穂発芽性は中程度
- いもち病ほ場抵抗性は、葉いもちにやや弱く、穂いもちに弱い

【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

月日	4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月		
	20			10 20			10 20			10 20			10 20			10 20		
主な作業と生育ステージ	播種			田植え			中干し			最高分げつ期	穂肥① 幼穂形成期	穂肥②	出穂期			通水最終日に十分かん水	落水は出穂期 25 日後以降	収穫成熟期

※玄米 1.9mm 以上粒数/全粒数 x100

【生育のめやす(稚苗育苗、5月中旬移植)】

生育ステージ	葉数(葉)	草丈(cm)	茎数(本/m ²)	葉色(SPAD)
最高分げつ期(7月5日頃)	10.0~11.0	43~47	580~640	35~38
幼穂形成期(7月20日頃)	11.5~12.5	62~68	550~600	33~36
1回目穂肥時(7月23日頃)	—	66~72	530~570	33~36
2回目穂肥時(8月1日頃)	—	—	—	33~36
出穂期(8月13日頃)	13.5~14.5	稈長 78	390~420	34~36

【収量構成要素及び品質の目標】

目標収量	540kg/10a
穂数	400本/m ²
一穂粒数	70粒
m ² 当たり粒数	28,000粒
精玄米粒数歩合※	82%
千粒重	23.5g
整粒歩合	70%以上
玄米タンパク質含有率	5.8%(上限 6.3%)

基肥施用	田植え	中干し・溝切り	病害虫防除	穂肥施用と登熟期の水管理	収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> ・完熟発酵ケイフン(イセ有機)等で「土づくり」を図る。 ・大豆後・基盤整備後・秋落ち田では作付けしない。 ・いもち病が発生しやすい圃場での栽培は避ける。 ・基肥は「越後の輝き有機 50 元肥」又は「けい酸入りエコ・5-5 専用元肥」の場合は 30 kg/10a、全量基肥肥料の場合は、「越後の輝き有機 50 ス・パ・元肥ロング」47 kg/10a をめやすとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・田植えは 5 月中旬をめやすに、経営規模や水利条件等を考慮したうえで適切に設定する。 ・栽植密度は 50 株/坪を基準とし過度な疎植は避ける。 ・1 株苗数は 3~4 本とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中干しは、遅くとも田植え後 1 か月をめやすに開始し、出穂 1 月前までに終了する。 ・溝切りは中干しの効果を高めるとともに、フェーン等の緊急時の迅速なかん水のために必ず実施する。 ・6月下旬にケイ酸肥料を追肥 	<ul style="list-style-type: none"> ・葉いもち防除は、育苗箱施用剤(Dr.オリゼフェルテラ粒剤)による予防防除を必ず行う。 ・葉いもちなど病害虫が発生した場合は、すみやかに特裁(エコ・5-5)を外して、追加防除を行う。 ・穂いもちに弱いので、フジワン剤による予防防除を必ず行う。 ・カメムシ類の防除は、畦畔等の草刈りとスタークルによる薬剤防除を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1回目穂肥は出穂前 21~18 日(幼穂長が 5~10mm になる時期)に、けい酸入りエコ・5-5 専用穂肥を 8kg/10a をめやすに施用する。 ・低地力ほ場は有機 100%肥料を追加する。 ・2回目穂肥は出穂前 12~10 日に、「けい酸入りエコ・5-5 専用穂肥」を 10kg/10a をめやすに施用する。 ・出穂 25 日後までは飽水管理とし、通水最終日には十分かん水する。 ・フェーン予想時は事前に深水湛水する。高温時は、水温上昇を抑えるこまめな水管理を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・収穫適期は黄化割合が 85~90%になった頃であり、積算温度のめやすは 1050~1100℃である。 ・胴割れの発生を防止するため、乾燥は粉水分を確認し適正温度及び適正速度で行い、急激に乾燥させない。 ・選別網目は 1.9mm 以上を使用する。 ・成熟期頃が多雨の場合は、穂発芽に注意する。

■使用肥料と施肥の目安

区分	肥料名	使用基準	10a 当り施用量		
			砂質土壌	中間	粘土質土壌
土づくり	イセ有機(完熟発酵ケイフン)	選択	75kg	75 kg	45kg
	牛ふん堆肥、豚ふん堆肥		0~500 kg		
	①みつばわ ②ようりんケイカル ③ニュー・ミスター ④マルチサポト Fe ⑤農力アップ		①60~120 kg ②120~160 kg ③30kg ④40~60 kg ⑤60~100 kg		
育苗	稚苗苗代配合	-	30g/箱 x 18 箱*		
田植前追肥	くみあい液肥2号	いずれか 1 資材	270g(18~23 箱)*		
	べんとう肥		360g(18~23 箱)*		
基肥	味好 2 号、フジミレット 731、みらい有機 831	いずれか 1 資材	30kg	0~20kg	-
	越後の輝き有機 50 元肥 又は けい酸入りエコ・5-5 専用元肥		30kg*		
	フレハ・ペ・スト 734		42kg*		
全量基肥肥料	越後の輝き有機 50 ス・パ・元肥ロング	-	47kg*		
ケイ酸質肥料追肥・根活性	ス・パ・シリカ、けい酸加里プレミア 34、ウォータ・シリカ、ファイト・アップ	選択	15~40kg(ファイト・アップ 500g 1袋 10 錠)*		
穂肥	味好 2 号、フジミレット 731	出穂 23 日前頃	0~20kg		
	フェザ・MAX、みらい有機 831	出穂 3 日前迄	15kg	0~15 kg	
	けい酸入りエコ・5-5 専用穂肥	出穂 21~18 日前頃 出穂 12~10 日前頃	穂肥診断により 0~8kg 原則 10kg	合計 18 kg	

*; 上限値。但し、基肥量が上限値未満の場合は、窒素成分の残量相当量を穂肥として施肥が可能です。詳細な施肥量はお近くの営農センターにご相談下さい。

■使用可能な農薬と使用回数 決められた農薬を予防重点で使用してください。

区分	農薬名	使用	使用回数の制限	
種子病害の予防剤	タフブロック	必須	—	
初期病害虫の予防剤	Dr.オリゼフェルテラ粒剤	必須	1回(JA 苗処理済)	
水田除草剤	一発処理剤	カウンシルエナジー 1キロ粒剤・フロアブル・ジャンボ	必須	いずれかの剤型 1回
	ヒエ専用中期除草剤	クインチャー 1キロ粒剤・EW・ジャンボ	選択	いずれかの剤型 1回
	広葉雑草中期除草剤	クインチャーバス ME 液剤 バサグラン 粒剤・エア-1 キロ粒剤・液剤	選択	本剤使用の場合はクインチャー及びバサグラン単剤の使用不可 いずれかの剤型 1回
いもち病予防剤	フジワン粒剤・1 キロ粒剤・パック・乳剤	必須	いずれかの剤型 1回	
カメムシ類の防除	スタークル液剤 10	必須	いずれかの剤型 1回 無人へり防除区	
	スタークル 粒剤・豆つぶ		個人防除区	
稲こじ病予防剤	ドイツホルド-A 又は Z ホルド・粉剤 DL	選択	いずれかの薬剤 1回	
紋枯病防除剤	バリダシン液剤 5・粉剤 DL・エア-	選択	いずれかの剤型 1回	
いもち病防除剤	カスミン液剤	選択	1回	

※農薬を使用する際は、必ず最新の使用登録内容を守ってください。(農薬確認令和 6 年 2 月 14 日)

本田初期害虫やイネアオムシ、いもち病は「Dr.オリゼフェルテラ粒剤」で予防を徹底! **農薬が育苗ハウスに残らないよう注意願います。**

除草効果を高めるため、畦畔の漏水防止と代かき時の田面均平化に努め、**移植後は 除草剤の適用条件内で早めに処理** しましょう!

■ 注意事項 ■
JA 米「新之助」のブランド確立と食味・品質の確保を図るため、次に掲げる事項に確実に取り組んでください。
(1) 県が定める水稻晩生品種「新之助」生産対策実施要綱及び実施要領を遵守して下さい。
(2) JA えちご中越ながおか新之助研究会が定める区分集荷・販売実施マニュアルに基づき、食味・品質の確保に取り組んでください。
<食味・品質基準>
① 整粒歩合 70%以上(農産物検査等級 1 等相当)、②水分含有率 14.0%以上、15.0%以下、③玄米タンパク質含有率 6.3%以下(水分 15%換算)
(3)新之助の食味・品質の確保に向けて、次の事項に的確に取り組んで下さい。
①栽培履歴の記帳 ②GAP の実践 ③毎年の種子更新
④JA えちご中越ながおか新之助研究会区分集荷・販売実施マニュアルの遵守
(4) 基準未滿及び取り組み確認が取れない場合は、「新之助」としての流通はできません。